

学会発表の思い出

片野修

私がはじめて学会で研究発表をしたのは、大阪で開かれた日本生態学会だったと思う。学会に行っても知らない人ばかりで、はやく自分の発表を終わらせて帰りたかったことを覚えている。しかも、発表はさんざんだった。15分の発表時間については、12~13分ほどで発表をやめて、残りは質問を受けるのがふつうである。しかし、私の発表は15分経っても終わらずに、議長の制止をふりきって、そのあと2分ほど喋って終えたために、方々から不評を買った。

私の所属していた京都大学の動物生態学研究室には、淡水魚を研究しているOBが多く、それなりに注目を浴びていたらしい。研究室の教官や先輩には、へたくそな発表をして研究室の恥さらしだ、とまで言われた。この一件がこたえて、その後私は予行練習をかかさず、二度と時間超過をすることはなくなった。時間通りに終わらせるためには、15分の発表ならば、5分でここまで、10分でここまでというように、途中でペースを確認するとともに、長くなりすぎた場合に省略するスライドや考察を決めておくことにした。原稿を棒読みするような発表はしたことがない。

それでも初回の失敗を取り戻すためには、おもしろい講演をしなければならないと思った。そこで次の学会では、当時研究対象としていたカワムツについて、昔話をすることにした。私はカワムツを個体識別するうえで、体表面についていた黒い斑点の大きさと位置に着目していた。その黒点は、むかしむかし童たちがカワムツをとらえて串に刺して焼いていたところに、通りかかったお坊さんが、かわいそうに思って串を抜き、川に逃がしてやった跡なのだという説明をした。いかにも宗教的な話だが、聴いておられた先生方が笑っておられたので、うまくいったと自信をつけた。

カワムツについての講演に対して、ある先生から「メスは一繁殖期に何度も産卵するのか？」と質問されたときは嬉しかった。個体識別していたからこそわかったことであり、カワムツやオイカワにくわしい先生から訊かれたことは自信になった。逆に、別のある先生から「河川敷の小池に棲むカワムツの成長が低すぎないか？」と質問されたときは腹が立った。成長の良しあしは個体密度や餌条件によって変わるにもかかわらず、自然条件下での成長率が高くないから研究の価値がない、と言われたような気がしたからである。

失礼な質問をしたこともある。北海道で開かれた淡水魚の研究會に、京都やその他科研の報告会が加わって、盛大な発表会が開かれたときのことである。著名な先生の発表のあとで、「それをやる意味があるのですか？」というようなことを言って、場が凍り付いた雰囲気になった。すかさず、京都大学の日高敏隆教授と川那辺浩哉教授が別の質問をして、場を修復する形になった。その先生はその後、ほかの先生の講演のときに厳しい質問をあげせたのだが、間接的に私のせいかもしれなかった。

講演が早く終わりすぎるのも問題である。日本の学会では、講演後の質問がほとんどなく

て、しらけてしまうことがあるからである。そのために、座長をする場合には 2, 3 個の質問を用意しておくのだが、座長ばかりが質問するのも格好が悪い。発表は短くなりすぎないように気をつけるべきである。

その後、大きな失敗はしなくなったが、体調が悪くて声が出せなくなったことがあった。鹿児島で開かれた学会では、発表の前日の夜に海に出かけ、スズキを釣ろうとルアーを投げ続けたことがあった。結局スズキは釣れず、翌日の講演では喉の不調から、うまく喋れなかった覚えがある。

1997 年にニューカレドニアで開かれたインドーパシフィック魚類学会では、私の発表は最終日の最後の順番だった。最初の数日間は暇だったのだが、学会のエクスカージョン・メニューの中に川での魚採集があり、それに参加した。車で何時間も川をさかのぼったところに美しい溪流があり、参加していた外国人たちが泳ぎ出したので、私も川に飛び込んだのだが、水が冷たくて風邪を引いてしまった。結局、それから 3 日間、ホテルに缶詰めになって寝ていたのだが、自分の講演を飛ばすわけにはいかなかったので、体調は悪いけれども発表した。自分では、そのころ英会話を勉強していたこともあり、割と上手に発表できたと思ったが、最終日の最後の講演だったので、聴きにきていたのは数名、それもほとんど日本人の知り合いだけだった。セッションのほかの発表者もすでに帰っていた。河川の魚類生態の話なのに、ほかにその分野の講演者がおらず、サンゴ礁の保全というセッションに入れられたことも影響したと思う。

学会における質疑応答は時間が短く、形式的なものになりがちである。厳しい質問などすると、その学生を指導している教官に目をつけられることもある。そのために、研究についての議論はもっぱら控室や懇親会、あるいは二次会でおこなわれていたと思う。私が大学院生であった頃、淡水魚の生態学の中心は京都よりも北海道に移っていた。とくに、後藤晃さんと前川光司さんは、気さくに話しかけてくれたので、ありがたかった。同じ世代では森誠一、少しあとの世代では中野繁が次々に論文を書くようになり、日本の河川における淡水魚研究のレベルは飛躍的に上がっていった。

やがて、私は水産研究所に勤務するようになるのだが、その前に横浜で国際生態学会、その翌年に京都で国際行動学会が開催された。その両方で、セッションを共同で企画したのだが、英語力がないのに座長を務めて大変だった。無我夢中で喋った覚えがあるが、案外日本人には好評だった。一方で、海外で開催された国際学会には、ほとんど参加しなかった。国際学会で著名な研究者と知りあいになったり、自分の研究をアピールしたりすることは、研究者にとって重要だと思うが、自分には向いておらず、自分の研究がそれほど評価されるとは思わなかった。

その後は、水産庁のプロジェクト研究にかかわることが増え、希少魚、アユ、外来魚などについて、主に水産試験場の研究者と緊密に交流するようになった。それまでほとんど参加していなかった日本水産学会にも行くようになった。その結果、水産分野で淡水魚を研究していた松宮義晴、塚本勝巳、谷口順彦といった優れた先生方を知ることができた。とくに松

宮先生と谷口先生はアユ釣りを愛好しており、のちに釣行をともにすることもあった。

いずれの学会においても、顔見知りが増えていったので、いつでも楽しく過ごすことができたが、京都にいた頃に付き合っていた研究者とくに魚以外の研究者とは疎遠になった。私としては、同時に数本の研究を走らせており、論文の発表も多かった。そのために、若い頃とちがって、学会ではすでに投稿したり受理されたりした研究を発表するようになり、準備も楽になった。一方で、日本では、私が主に研究していた温水性の淡水魚についての研究者は少なく、学会でも聴きたいと思う講演は少なかった。

外来魚の駆除について講演するようになると、駆除に反対する質問者から厳しい質問を浴びることもあった。この方法によって多くのバスを駆除することができたと言うと、「そのバスはどうしたんですか？」と怒ったように訊かれたので、「お墓をつくって埋葬しました」と答えたことがある。学会ではないが、長野県内の研究会で講演した際には、録音機をもちこんだバス釣り推進派から厳しい質問を浴びたことがある。

とくに、水産研究機関がブルーギルやチャネルキャットフィッシュを持ち込んだことを訊かれることが多かった。実際、戦後に内水面養殖を推進しようとする人たちが、外国から多くの淡水魚を持ち込み、場合によっては放流したことは失敗だった。成功したと言えるのはニジマスのほか数種くらいで、そのほかの外来魚は害魚となって生態系を破壊している。(ニジマスも北海道の湖沼河川では害魚と言われている)。とくに霞ヶ浦と利根川水系や琵琶湖・淀川水系ではチャネルキャットフィッシュが水産業に大きなダメージをもたらし、上高地ではブラウントラウトやカワマスによって在来の子ケマス類がほとんど駆逐されてしまった。オオクチバスやコクチバスは釣り人による放流によって広まったと推測されているが、いずれにしても、その後始末としてブルーギルやオオクチバスの駆除技術の開発を担うことになったのは本意でなかった。

外来魚の研究と並んで、私の研究生生活の後半は上田庁舎内の実験研究に費やした。さまざまな形態の人工池を使って多くの実験を行うことができたのは幸せだった。大学では、水槽一つ置く場所を確保することもむずかしく、ほかの研究室や研究者との縄張り争いが激しいと聞かすが、上田ではスペースはいくらでもあり、河川水と井戸水を使うことができた。

50代になると、学会発表を訊いていて、「その研究は意味があるのか」とか「結果の解析方法がなっていない」などと思うことはあっても、若い時に失礼な質問をしたこともあって口に出せないことが多かった。この頃に強く感じたのは、指導教官が平凡な発想しかできないと、学生も紋切型の発表しかできず、それに対して何を言っても無駄だということだった。

学会では控室などでぶらぶらしていることが多いのだから、積極的に自分の研究を話して意見を求められてもよいと思うのだが、そういう積極的な研究者は少なかった。一方で、私自身の講演について厳しい意見や批判を受けることもなくなり、この点は残念だった。それを補ううえで、一流の国際雑誌に投稿することは、たとえ却下されても有意義だった。

学会ではないけれども、自分が印象に残ったものとしては、高校生の頃に聴いた芸術家の岡本太郎の講演が挙げられる。大きな手振りとか、かつと開いた眼が印象的で、生まれてきた

からにはおもしろいことをしろ、人の目は気にするなと言われたことは、今でも心の中に残っている。映画監督の篠田正浩の講演は、静かな調子で、自分がどこそこに行って経験したことを順番に話していくスタイルでありながら、含蓄に富む内容が盛りだくさんで勉強になった。後年、淡水魚保全研究会で設立基調講演をしたときには、このスタイルを真似して、宮城の伊豆沼やその近くにある石ノ森章太郎の生家を訪れた話をふくらませて話したのだが、わりとうまくいった覚えがある。

人の話を聴くことは重要である。その点で、学会での発表だけでなく、広く大学内外で様々な分野の講演を聴いて刺激を受けることを、若い研究者に薦めたい。